

あ い さ つ

稲化会会長 関根吉郎

私はあと1年と少々で70才になり、停年退職を迎える。こういう老人になると、当然のこととしてあとあとのことが心配になってくる。世界がどう進むのかは仲々見当が付かない。技術は益々進むであろうが、それがとりも直さず自然からの背離であることに気が付かない。

化学も人類に対し、福祉の役割ばかりしてゐるとは考え難くなってきた。自然にないものを、即ち神のご存じないものを生産するこ

とに対する神の怒りでもあろうか。ボヤ程度の火事で死者が出るようなことは昔はなかった。PCBにしてもダイオキシンにしても、何れも勝れた性質をもつ化学物質であるが、人間の生命を脅かす存在に反転してきた。人間はいくら威張ってみても一つの生物にすぎないことをもっと自覚すべきであろう。自然科学者の反省の足りない無邪気さが心配なのである。

新助教授紹介

59年4月に化学科助教授に就任されました松本和子先生に一文をいただきました。

松本和子

生まれは東京、育ちも小学校以来ずっと東京なのですが、ちゃきちゃきの江戸っ子とは程遠い狛江の田舎育ち。東京大学理学部化学科を卒業以来この3月までそこで助手をしていましたので、早稲田は全くの初めてです。

授業は1年生の無機化学を担当しています。無機化学というのは、化学で使う研究手法を主に問題にする分析化学や物理化学の分野と異り、各元素固有の性質が強く、それぞれに特異的なおもしろい化合物があり、それを「何々の法則」のように統一的に述べられないので内容がどうしても百科事典的な事実の羅列になりがちで、これをいかに話すべきかまだ悩んでいる状態です。

少くとも心がけてほしいと思うことは、化学者としての常識のようなものを身につけるということです。化学的にもおもしろい事実に

将来ぶつかった時、それがおもしろいとすぐ感じられるような一種のセンス、これは言葉ではひどく非科学的でおかしいと思われるかもしれませんが、そういう直感的なものを養ってほしいと思います。個々の具体的事実はもちろん大切で、これがある程度身につかないと化学が使えないのですが、常にその底にある基本原理は何かと考えてほしい。個々の事実は興味を持った時でも調べられるということ。

さて、私自身は東大時代には、原子吸光・発光法等の分析化学と、錯塩化学の両分野を手掛けていましたが、最近は錯塩化学に力を入れており、特にいかにしたら(どういう配位子を使って、どういう構造にすると)金属の異常酸化状態を安定化できるか、またそういう化合物を用いておもしろい反応(水の光分解、金属酵素様反応など)をやりたいと思っています。

少々長くなりましたが、最後に趣味のことなども述べさせていただきますと、実はテニスが好きなのです。構内で学生達がボレーの練習をしているのを見ると思わず体がムズムズしてくる程です。昨今のテニスブームで始めたにわかプレイヤーではなく、学生時代

からですからもう15年もですが、途中子供が出来たりしてやらなかった時もあり、腕の方は今ひとつです。家庭には男の子二人(小3

と幼稚園)がおり、最近の日曜に子連れで1時間やる程度です。練習不足ですが、機会がありましたらお手合わせをお願いします。

教授随想

本年度より、化学科の教授方の持ち回りで一筆ずつ書いていただくことになりました。第一回目は稲化会副会長であられる高宮先生にお願いしました。

就職担当者になって

高宮 信夫

昭和57年6月から関東工業教育協会大学教育委員会に委嘱され、いまその一期目の任期を終わろうとしているところである。この委員会には4つのワーキンググループがある。すなわちA-WGは一般教育の現状と問題点、B-WGは学生の多様化、C-WGは推薦入学問題、D-WGが学部生の就職問題についてのグループである。私はこのD-WGに属して就職問題の討議に加わってきた。

この委員会で一番の関心は就職協定に関するもので、協定は現実には守られているか、守るべきか、協定内容を変更もしくは廃止すべきか、協定が必要な真の理由は何か、大学卒業生の各学問分野毎の数と企業の求人動向

とはどんな関係にあるのか、など多岐にわたっている。こうした経験により少なくとも実態はかなりつかめた段階で59年4月から就職担当者になったので、多くの会社関係の方々とは接する時に都合のよいことが多い。会社の内容は名前の示すとおりではないことが多く、新しい時代に向けて積極的な事業展開を試みている所が大多数である。

このような会社で求めている人材に共通して言えることは、①バイタリティーに富んでいること。②問題解決能力が優れていること。③学力は一定水準に達していればよいこと。④健康であること、などである。所によっては、少々変わった人物でも何か特技があればよい、という基準で採用することもあるようである。企業の立場から見れば1人採用すると生涯賃金は2億円から3億円という勘定だそうであるから、採用は慎重にならざるを得ない。

化学科卒業生としては今度第9期生を送り出すことになり、その歴史は浅いが幸いに卒業生の評判が大変よく、社会から歓迎されていることは在校生にとっても、われわれ教職員にとっても非常に心強いことである。

研究室だより

■ 井口研究室

今春当研究室からは、4人が旅立ちました。学部を終えた宮沢(日立)、永松、村山(共に東工大大学院)と修士を終えた毒舌家の林(浦和商业高校)の各氏です。今後の各分野での活躍を期待します。

さて今年度は、先生を含めて13名の大世界で、実験器具の無い当研究室ですが、手狭になっています。以下に活動現況の概略を記します。当研究室は、各自が夫々異った課題を持って活動しており、大別して分子軌道法と物性の両面から理論的研究を行っています。先生は最近ソリトン間の相互作用や摂動を

受けたソリトンの研究をされています。昨年6月より金子氏(高橋研)の後任として、化学基礎実験の非常勤講師をしている鈴木氏は、CO-H₂分子間相互作用ポテンシャルの計算;最近カラオケに目覚めたD2の小林氏は、低次元電気伝導体の理論的研究;春の野球大会でエースとして2勝をした(ちなみに秋は惨敗でしたが)渡邊氏(M2)は、モンテカルロ法によるポリエンの電子状態の研究;今年度量子化学AのT.A.をしている間所氏(M2)は、ポリアセチレン中の電子相関が励起スペクトルに与える影響や分子軌道法の研究;理化学研究所の渡部力先生の下に派遣されている中西氏(M1)は、衝突理論の研究;M1の吉田氏と筆者は、将来の研究に備えて模索中です。亦後期に入り、愈々論の研究も始まり、計算機端末の取り合いに火花を散

らしながら、研究に取り組んでいます。吉木、吉田、仲野の各氏と長谷川嬢の4人は夫々、異った手法を用いてポリエンの研究を、村上氏は分子軌道法を使って、分子間ポテンシャルの計算をしています。

課外活動として、春は富士五湖方面に出掛け、夏は追分セミナーハウスへゼミ合宿に行つて勉強も程々に、テニスを十分やりました。

なお各種分子軌道法のプログラムを取り揃えてありますので、簡単な分子の計算は請け負います。気軽にお申し出下さい。

(Schrödinger 方程式を解けない女性とは話したくない M1 横山)

■ 伊藤(紘)研究室

ラマン分光学は、長い歴史を有する分子分光学の一分野であるが、ここ数十年の間、実験的手法の飛躍的な進歩に伴って、無機・有機化学、生化学、医学、表面科学など種々の物理化学周辺分野へと浸透しつつある。この様な時代の潮の中で、本研究室は種々の合成ポルフィリンやピピリジンなどの金属表面吸着種、ポルフィリン金属錯体の π -カチオン、 π -アニオンラジカルなどの分子構造を、主としてラマン分光法により解析している。現在、所属している学生は、D1:1人、M2:3人、M1:2人、研修生:1人、学部4年生:6人であり総計13人にもなる。最近、従来からの日本電子400D(ラマン分光器)の他に、日本分光R500を入手したものの、学生一人あたりのマシンタイムをある程度確保するためには、汎用性の高い400Dを昼夜2交代制で使用せざるを得ない状況である。

研究内容を簡単に紹介すると、(i)テトラフェニルポルフィン、テトラピリジルポルフィン、テトラアルキルポルフィンおよびそれらの金属錯体などと銀との反応性および反応生成物の蒸着銀表面における構造をSurface-enhanced Raman Scattering (SERS) 分光法により解析している。(ii)溶液中電気化学的に生成させたテトラフェニルポルフィン、テトラフェニルクロリンのZn、Mg錯体の π -アニオン、 π -カチオンラジカルの構造を共鳴ラマン分光法により解析している。(iii)銀電極表面に吸着したピピリジン、テトラ(4-N-(or 2-N)-メチルピリジ

ル)ポルフィンおよびそのFe錯体の吸着構造、電気化学的挙動をSERS分光法により解析している。(iv)さらには、SERS分光法による希ガスマトリックス中の銀クラスターと種々のポルフィリンとの反応生成物、銀コロイド表面吸着種の構造解析など、目下のところ研究対象は多岐にわたっている。

(D1 金)

■ 伊藤(礼)研究室

82年度は5人、83年度は4人+1人(?)、そして84年度も6人-1人と、このところ多量の卒論生を抱える我が研究室は、未だに51号館で孤軍奮闘しております。

量子力学的理論により化学的な知見を得るために、色々な手法を用いる訳ですが、虚ろな目をして端末機をいじっている様子は、化学科の研究室としては異様なものに見えるかも知れません。

さて、ここで「ぐいーん。ずだだだ」というS科の音や、北京放送の時事討論会をBGMとして活動する人々の横顔を簡単に紹介致します。

研究室の、一番窓側に位置する机は、助手の森氏。常時「うふふ」と言いながら仕事をしています。化学科と共に歩んできた1期生。カフェイン、ニコチン中毒は有名。(噂によれば趣味は徹夜)。後ろの机がD3の笹金氏。何故か2月18日以降、ルンルンしていますが、周囲の者は、この雰囲気にはノレンノレンと言っています(参考:当研究室保存の時価数万円のテメ米)。斜め後ろはM2の岩田氏。口癖は全て物真似されて、最近は無語症気味。机の前の、アイドル歌手K(芸映)のカレンダーのためか、肉屋と呼ばれています。後ろにM1の竹村。皮肉屋と呼ぶ人もいます。自動車文庫を作る予定とのこと。隣りが研究生の田鍋。「てめえら人間じゃねえ」等と言ってはマイコンに徹夜仕事を命じる高校教師。少し離れて斉藤氏。博論関係で多忙の様ですが、山へ行く時間はあるのでしょうか。新4年生の方は、前任者と比較される事の多いA嬢、人の顔を観察しながら話をするK1、北斗神拳を習得したK2、音響偏執狂のS、女の子を操る「マベット」N、といった面々ですが、このメンバーが1年間でどの様な成長

を遂げるか、伊藤先生も大変興味を持っておられます。

(文責・K**2村)

■ 関根研究室

『人生は一瞬だぞ』

これは関根先生の言葉である。

稲化会報に我々の研究室紹介を記載するにあたり、研究内容はもとより、この言葉に代表される我々のもつ雰囲気に触れぬわけにはいかない。

我々関根研のスタッフは現在、関根先生、池田先生、修士2年4名、修士1年3名、研究生1名、学部4年5名で成り立ち、研究テーマは主に次の4項目である。

- 1) 共重合体膜の酸素透過性
- 2) 無溶媒中の水素結合性コンプレックス
- 3) ポリオルガノシロキサン合成と触媒活性
- 4) ポリイオンコンプレックスの形成

研究成果も着実にあがっており、5月末の名古屋での高分子学会も成功をおさめ、現在は、卒論、修論へ向け躍進の毎日である。

さて、スタッフについて触れよう。昨年度は修士4名、学部3名の計7名が中心となり研究室を1つにしてきたわけだが、十人十色ならぬ七人七色、まさに虹色スタッフであった。各人が鋭い個性と良い意味での毒をもちつつ、ややもすると同して和せずとなりがちな中、完全と和して同ぜずを実行してきたのである。これも、研究室自体が責任ある自由な空気につつまれているためと言えよう。研究に関しては1級、遊びにかけても1級、真の意味で実現されていること、誠にほこらしい限りである。

数ある大学の中、数々ある学科の中でも、定員30名というオアシスのような存在である早稲田大学理工学部化学科に籍を置くことのできる我々は幸福である。どの研究室をみても素晴らしいと思うが、少くとも我々関根研スタッフ一同、我が研究室を“OASIS OF OASES”と言っているのは、過言であろうか。

最後に、関根研入門のための難問をひとつ。

『エネルギーとはなんぞや?』

(片桐 進)

■ 高橋研究室

たか橋けんの ファンの みな様え

かく問の あきや

そつ論・しゅう論の おい込みも 近いで

わしらの へやでも CARSぐみは

じっ験 よう やっとる。

せやけど じ間分かいらマン ぐみは

DARSS こわれてしもて じっ験

でけへんのや。

ことしは 夏の ラマン コンファレンスと

あきの 分しこうぞうの おかげで わしら

どこへも あそびに 行かれへんかった。

がっ会 なんて 大きらいや。

この うらみは いっ生 わすれへんで。

とつ然やけど わしらの こと すこし

おしえたる。

わしらは せん生 ぬかすと M2の

ひる川、M1の たけ田と すず木、それに

B4の い坂、いとう、大きく、大の、

さいとう、せき、中の この 10にんで

ぜんぶ なんや。

うちに ながいこと おった いがらしの

おっちゃんは 三井とう庄へ いきよったし

金この おっちゃんは キャノンへ

いきよった。

このまえ 金この おっちゃん ラマン

とりに 来とったけど まえに くらべて

おなか しまとったで。

きょ年まで おった くる柳の 兄ちゃんは

トヨタに、まつ原の ヤーさんは NECに

鳥いの じいさんは 日立に、なが田の

ぼうやは ソニーへ いったはずや。

にんげん 世のなかの ために

はたらかんと いかんのや。

わしも 4がつに なったら はたらきに

いく つもりや

会しゃ くびになったら かねってくる。

OBの みな様も あそびに きてや。

さしいれ わすれると から口の コーヒー

まってるで。 わすれんといてや。

(まだまだ かい人21面相)

■ 高宮研究室

当研究室の(大学院での)正式名称は、早稲田大学大学院 理工学研究科 応用化学専

攻 化学専門分野 有機化学部門 有機化学研究 高宮研究室といます。しかし有機化学研究室といっても、やっていることは、主に気相での触媒反応（液相もあります）なので、普通の有機化学の研究室とは趣が異なっています。まず研究室のドアを開けたら、天井を見上げて下さい。塩ビ管が縦横に張りめぐらされているのに驚かれるでしょう。これは、窒素や水素ガスを反応管へ送るための管と排気のための管です。最近、集中配管工事があって多少はすっきりすると思われるかもしれませんが、ガスクロに排気管をつけたこともあって現状ではかえって繁雑になっている状態です。

研究内容は、一言で言えば○○による△△の××反応ということになります。触媒や原料物質は人によって異なりますが、卒論・修論の題名は結局このパターンになります。

さて、研究室を出ようとして今度、目につくのはドアの内側に張ってある、研究室の人間の現在の所在を示す表？です。他の研究室では、ちゃんとした表になっていて、マグネットを移動させて自分のいる場所を示しているのが普通ですが、高宮研では、模造紙に大きく高宮研の「高」の字を書いて、その線で在室、帰宅などの領域を作り、そこに自分の名前を書いた磁石の札？を移動させることで現在地（を示していないこともあります）を示します。

また高宮研は実験は単純作業が多いのでそれほど忙しくなく、終了も早いのですが30分ごとのトラップのため、実験を始めると昼食をまともに食べる時間もなくなってしまいます。また実験の合間や終了後にはトランプをやっていることもしばしばで、今も机の上には「ドボン」の点数表が置いてあります。

しかし、文献ゼミの前なのに、なんで私がこの文章を書かなければならないのでしょうか。（押しつけられた4年有志）

■ 多田研究室

皆様、いかがお過ごしでしょうか。当研究室の現況についてお知らせします。多田先生は英国及び西独の大学数校に招聘され、約4ヶ月間欧州に滞在し各地で講演や討論会を行い今年の9月に帰国しました。又、今年から

週一回の慶応化学科での講義も担当されています。

次に研究内容ですが、当研究室では従来より大別して二つの系が研究されてきております。一つはクラウンエーテルの系であり、これはベンゾクラウンエーテル部位もしくはジメトキシフェニル基を有するピラジンの光反応の研究を経て、現在はジシアノピラジンの出発物質として種々の含窒素複素環化合物の合成及びその反応性の検討を行っています。担当者は都築（M2）と伊藤（B4）です。

もう一方は生体内において種々の反応に携わっている補酵素 B₁₂ のモデル化合物であるコバロキシムを用いての B₁₂ の反応機構の検討及び合成反応への応用であり、現在機構研究の方を菅原（M2）と中村（B4）が、合成反応の方を橋本（M2）が行っています。

又、近年もう一つ系が増えました。これはシクロデキストリンに基質物質を取り込ませ、ここにラジカルを発生させて基質物質の転位反応を起こさせようというものでありまして、平塚（M1）と十時（B4）が担当しています。

研究室の雰囲気は明るく家族的で、しかも大変ユニークです。キャラクターを少し、気さくな“ボス”こと多田先生のもと、ジャズ気遣いのK・T、実験室の中でも踊りまくる元ダンス部のA・H、大酒飲みのK・S、4年をからかっていつもニコニコしているM・H、いつもぶつくさ言っているS・T、週一回はルンルのT・N、電気器具の修理が大好きなT・I、以上のような面々であります。研究内容・人物どちらでも興味がある方は是非一度当研究室にいらして下さい。

（K・S）

■ 新田研究室

今年度の新田研は、D2（近年、助手とも呼ばれている）1名、M2が2名、M1が1名、B4が4名と、なかなかにぎやかな構成となっています。このうち、M2の井さんは三菱化学、寺田さんは住友化学（かなりもめましたか…）、B4の村田君は出光にそれぞれめでたく就職が決まりました。残りのB43人は何を思ったか、入院することとなり、来年の私（M2）の楽しみ（言わずと知れた

M1 いじめ)が増えました。

さて、当研究室では個々で違ったテーマが与えられるため、研究内容は多岐にわたっています。しかし主な興味を中心は、1) N・O・P等の原子を含んだ複素環化合物と、2) ビシクロ・トリシクロ系の分子内歪みを持った化合物にしばられています。1では金属カルボニル化合物、リン化合物等を利用して新規な複素環を得、その反応を調べ、また2では、歪みを持つ化合物に対する付加、光、熱反応について研究をしています。

研究室の空気は先生の人柄が示す通り、いつでも大変明るく、時には奇声?も飛びかいほとんど子供たちが「実験おもちゃ」で遊んでいるような雰囲気を与えます。しかし、当研究室では最近、「実験実力主義」の風潮が

高まっており、実験がうまくいかないと、それがたとえマスターであったとしても(B4から)平気で笑われ、さんざん蹴とばされてしまうのです。だから上の方は常に下の人の実験を監視し、攻撃体制をしいておかないと生き残れないのです。(!?)

このようなストレスにさいなまれている?人が多いせいか、先生を始めとして、酒に異常に強い人が多く、今年ももう何度も修羅場を経験してしまいました。

ほとんど異常と言われる新田研の面々ですが、先生を中心になかなか鋭い結果を出しており、現在、12月のハワイ国際学会へ向けて、突貫実験中!というところです。

(M1 宮野)

学部生の声

● 1年生

私は、「化学科のある大学」ということで、冗談で早稲田を受けたら、何を間違ったのか、受かったのです。加えて、この手の文によくある建前を並べるといことが不得手なので、私にこの原稿を依頼するのは間違いです。しかし、間違っ合格したついでということで、感想を少し書いてみようと思います。

入学して一番驚いたのは、化学基礎の有機実験に水道水を使うことです。水道水でも影響ないのでしょうが、少々気になりました。

今まで化学といえば物化、分析、無機、有機の4つに分かれると思っていたのですが、研究室には量子、構造と、新しい(私には)名前が並んでいました。ここに、私の考えていた化学と現代の化学との大きな隔りを感じまして、卒業までには少しでも現代の化学に近づきたいと思っています。

間違っ早稲田に入った私ですが、校歌を覚えてから帰属意識が高まりました。このあたりが、早稲田の懐の大きさなのでしょう。

(R.K)

僕は理学の抽象性を好かず、工学部志望であった。にもかかわらずこの学科を受けたのは、文系の友達から借りた募集要項で風変わりな化学科を知ったからで、まさか本当に化学科の一員になるとは思ってもいなかった。

理学系となってしまった僕はこれも運命と諦め、何か大きな事をしてやろうと考えた。しかしひと月と経たぬうちにもうその意志が揺らいできたのである。その理由はサークル活動等で忙しくなっただけなのではあるが、それではどうしても意志が貫き難い。

このあいだ早稲田のOBから聞いた話である。文系と違って理系の場合は社会へ出てから頭だけの勝負であり、有名国立大卒と闘っていかねばならないようだ。別に何も問題はなさそうであるが、実は早稲田は国立に比べ明る過ぎるらしい。我々に勝ち目はないのか。

6月2日にオリエンテーションがあった。楽しそうな先輩達を見ていると、これぞ私学の明るさ、かつ少人数を生かした最高の環境ではなかろうかと思えてきた。忙しいという事は、若いうちにやる事がたくさんあるだけの事で生活に活気があることを示しているのではないか。忙しさをうまく利用して悔いのない学生生活を送りたい。

(M.Y)

● 2 年 生

はじめまして。僕は2年の化学科の者です。現在、僕達のクラスは、約30名(女子率10%)です。

僕達の担任は、新田信教授です。新田先生は、東西線の葛西に住んでいるそうです。でも、新田先生は時々居眠りをしたまま西船橋まで行ってしまいます。(と友人が申しおりました)といっても、この事は今回の話には、余り関係がありません。

僕達が1年生の時、新田先生は、化学Aと有機化学Aという講義をうけもっておられました。そして、最初の講義を受けたときの印象は、当時、まだ純粋であった僕にとって、非常に強烈なものでありまして、今でも僕の臉にしっかりと焼きついています。というのも、新田先生は、ジャイアント馬場のような聞きとりにくい声で、非常に難解な講義をなさるからであります。先日、レーザー光を右45度から照射したところ、新田先生の顔がホログラフィーとなって現れてきたくらいですから、いかに強烈な印象であったかおわかりでしょう。

さて、その新田先生は、いつも笑顔で講義をなさるうえに、些細な質問をしても懇切丁寧に答えてくださいます。頭の悪い僕が試験前に、延々3時間にわたる質問をしたこともありましたが、先生は厭な顔一つせず、笑顔でつき合ってくれました。とても親切な先生であります。

新田先生は、本当に熱心で良い人で、今では村の衆から「新田どん」と呼ばれて慕われているそう。めでたし、めでたし。

(追記) この文章は、新田先生の紹介ではなく、化学科2年の雰囲気伝えるべく書かれたものです。念のため。

(2年生の有志)

● 3 年 生

私たち学部3年生は、御存知のように、近年にない少人数です。その構成を紹介しますと、男…10+2人、女…4人です。私たちがよく4年生や大学院の男の方と談笑をしますと、3年生の人数を聞かれ(たいていの人がなぜか聞く)、答えますと、「おまえら本当

に恵まれているぞ」といわれます。

最近の私たち3年生の、できごとといえますと、5月31日の「化学科恒例野球大会」に喜んで参加したということです。(TAのATさんがむりに参加させたという説もあるが)みんな一丸となって、特にJ・T君のピッチング、M・M君の守備などにもかかわらず、全敗してしまいました。そのため、それまでの疲れがどっとでて、行きとは違って、帰りはみんないじけていました。このことで大学院の方が、野球の練習を日々、十分やっているということがよくわかりました。

もう一つのイベントとして、野球大会の翌日の、六本木(女性の希望で)での飲み会がありました。野球大会のときは、女性が一人も参加していませんでしたが、飲み会では全員来てくれました。6時頃から飲み始めて、10時頃に散会となりました。そのスナック風の飲みやには、最近はやりのカラオケが置いてあり、みんな大いに飲んで、歌って、食べて楽しくやりました。(なぜか私が歌ったときだけ、みなさん驚いた顔で聞いていましたが)みんな集まって、そうしてお酒を飲めるということも、少人数のおかげだと思います。それでもみんな少し飲みすぎたようで、翌日の物性の、化学科の出席者がいなかったそうです。それではこのへんで、おわりにしたいと思います。(文責 K・Y)

● 4 年 生

我々4年生は、3月に研究室に配属になって以来、卒論のテーマ及び、その下準備に毎日多忙な時間を過ごしています。今までのわりと暇な学生生活とは違って、束縛される時間が長くなっています。そのため精神的にも肉体的にも、疲労が激しく、皆、顔を見ると、どこかボーッとした雰囲気を醸し出しています。主に、実験をやっている人達は、実験結果の是非によって、欣喜雀躍の状態と、絶望の極を這いずりまわることを、繰り返しています。但し、後者の状態にあることが、圧倒的に多い様です。

卒業後の進路は、化学という学問の性格と就職条件を反映してか、早大、及び他大学を含めて、大学院への進学を希望する人が多いのが特色となっています。

我々4年生は、入学当初56人という大人数でありました。この定員を大幅に上まわるといこと(定員の約2倍)は化学科開設以来、初めてのことでありまして、いろいろな形で諸先生方の頭痛の種となっているようです。

大人数ということは、いろいろな人間がその中に含まれているということ、精神面で大人っぽい人もいれば、いまだに少年の心を色濃くのこしている人もいます。また、素直な人もいれば、どこか精神的なゆがみがある人もいます。ということは、機械的に分けられた1・2年の語学のクラスの友人以外の友

人を選ぶということが可能になってきます。4年生全体をながめて見ると、約10人ぐらゐの自然発生的な小集団を、いくつか形づくっていて、その小集団で酒を飲みに行ったりすることが多かったようです。現在の4年生が一同に顔を合わせて歓談するということは今までに数える程しかありませんでした。いわば離散的な状態が続いていました。しかし卒論というプロジェクトの前で少しずつではあるが離散的な雰囲気が緩和されつつあるようです。

(文責 TAK)

化学科野球大会

10月23日
多摩川グラウンド

- 優勝 関根・新田研チーム
2位 佐藤研チーム
3位 伊藤(紘)・高橋研チーム
4位 3年生チーム
5位 井口・伊藤(礼)研チーム
6位 高宮・多田研チーム

来年の幹事研は2位のチームという事でしたが、2位が応化の佐藤研になったので高宮・多田研が来季もひき続きやることになりました。

会計報告

1984.10.31 現在

58年繰越金	321,862
■ 収入の部	
会費	351,000
利息	4,507
計	355,507
■ 支出の部	
稲化会報(第2号)	55,590
消耗品代	14,350
雑費	8,000
計	77,940
■ 残金	599,429
(単位・円)	

稲化会役員

会長	関根吉郎
副会長	高宮信夫
監事	井口 馨
評議員	井口 馨 伊藤紘一
	伊藤礼吉 関根吉郎
	高橋博彰 高宮信夫
	多田 愈 新田 信
	松本和子
	長瀬 裕 矢野圭一
	中山 匡 小又昭彦
	井上国見 宮田信夫
	百瀬 浩 小林慶裕
常任委員	会計 新田 信
	庶務 伊藤 紘一
学生幹事	M2 橋本顕生
	M1 武田幸雄 宮野浩行
	B4 伊藤信一 伊藤貴和
	関 敦司
	B3 大島 薫 依田桂一
	B2 遠藤 茂 境野佳樹
	横田知宏
	B1 小西隆太郎 湯沢哲朗

お 願 い

- OBの方々の消息等のご連絡をお願いします。
〒160 新宿区大久保3-4-1
早大理工学部 化学科連絡事務室気付
- 稲化会費を払いましょう。
正会員 1,500円 , 学生会員 750円